
「白銀の華」の代わりにどうぞ。

ばにえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「白銀の華」の代わりにどうぞ。

【Nコード】

N3125U

【作者名】

ばにえ

【あらすじ】

異世界に渡ってしまったにリエナが、後宮で妾として奮闘するお話。あらゆる手を使って集めた情報を武器に、皇帝を上手く欺きつつも帰還方法を探す。

白銀の華シリーズが更新できないことを申し訳なく思った作者が、更新できない間少しでも読者様の気が紛れれば……と考えて執筆したものです。女性向けです。

1・リエナの目的

ここは、とある王宮の一角。

「あー、疲れた〜」

繊細な彫刻が施された扉が開き、小綺麗に整えられた部屋に一人の少女が姿を現した。

地味な茶色の髪に、同じ色の瞳。何処にでもいる普通の少女だが、その身に纏うドレスは華美、いや豪華と言つべきか。

余りにも派手すぎるそれだが、金遣いの荒い貴族にはお似合いかもしれない。

「おかえりなさいませ、リエナ様。……で、どうでしたか、宴の方は」

ドレスを脱ぐリエナを手伝いながら、侍女のアリーはわくわくした様子で問う。

「もちろん、完璧だったわ!!!」

夏川里菜、18歳。

異世界トリップの後、運良く公爵家の養女に迎えられた。

帰還方法を探すため公爵夫妻が提案したのはなんと、妾として王宮へ上がることだった。

「王宮は膨大な量の情報が飛び交う場所だ。それに、貴族でも手に

入らないような貴重な書物もたくさんある。妾になれば、ここに
いるよりもずっと多くの情報が得られるにちがいない」

公爵家当主はそう語る。

だが、こんな小娘が王宮をこそそ嗅ぎ回っていて、まずいのでは
正直、世界を渡る方法を探すためには、禁書にまで手を出さなけれ
ばならない可能性もあるのだ。
私に何かあった時一番に迷惑を被るのは、他でもない彼らだ。

「大丈夫、後宮には多くの女性がいるから、一人や二人増えていた
ってわかりやしないわ」

奥様は、茶目つ気たっぷりにウインクをした。

本当に大丈夫だろうか……と心配を拭いきれないまま、私の後宮で
の生活は始まった。

今日は、後宮に入って初めての宴だった。

今代の皇帝は、暴君であった先代皇帝の圧政に苦しむ民を憂い、彼
を討ち即位した。

皇帝は即位後、多くの改革を打ち出して国を再興した。
彼の手腕は優れたもので、この国は瞬く間に豊かな楽園へと変貌を
遂げていった。

優れた統治能力を持つ皇帝は、20歳と若いながらも賢君と謳われ、
その優れた容貌と相まって女性たちの心を鷲掴みにしている。

さて、そんな彼の後宮には望む望まざるに関わらず、多くの女性が
いる。

女性たちは、自分の美貌と才能を武器に国王の寵愛を得ようと必死
だ。

今回の宴は、水面下で血みどろの争いを繰り広げている後宮の女た
ちや、陛下の目に止まろうと参加した令嬢たちが集まる皇帝主催の
宴だった。

「毎晩寂しくて眠れませんのよ」

「陛下、実家から美味しいお酒が届きましたのよ。今晚ぜひ一緒
しませんか？」

「あら、陛下はお疲れでいらっしやるようだから、私の演奏を聴き
にいらっしやるべきだわ」

女たちは、その色っぽい唇にのせてそれぞれに言葉を紡ぐ。
そこらへんの男だったら、間違いなく誘惑に乗っているだろう。

……だが、皇帝陛下の場合は。

女が触れるたびに、誘惑の言葉を発するたびに、眉間の皺は深まっ
ていくばかり。

勿論その表情は、ごくごく僅かな変化に過ぎないので誰も気付かな
い。

ふふふ、楽しい光景ね。

もともと皇帝の寵愛に興味のないリエナは、愉快そうに眺めている。

実は、この皇帝陛下、貴族の女性が嫌いなのだ。

甘ったるい香水の匂い、目が痛いほどの派手なドレス。

美しい見た目とは裏腹にどうやって人を蹴落とそうかと画策を巡らす醜い本性は、蔑みや嫌悪しか感じられない。

……らしい（リエナ・リサーチより）。

派手なドレスに身を包んだ女たちは、どんどん皇帝を囲んでいく。もちろん、その女の中には周りの女性と同じく似合わない極彩色の服を纏ったりエナも含まれている。

すべての女が皇帝に群がっている状況では、壁の花となっていたり地味なドレスを着ている方が目立つのだ。

おっと、私もそろそろ誘惑合戦に加わらなければ。

これ以上興味のない素振りを見せると、陛下に気に入られかねない。なんせ、陛下の理想の女性の条件に、地位や権力に媚びない女性とというのがある（リエナ・リサーチより）。

皇帝の苦しむ様子を、心の中で笑みを浮かべつつ眺めていたりエナも女をかき分け皇帝に近づく。

「皇帝陛下、私の部屋へもぜひお渡り下さいませ」

その勢いで皇帝の腕に絡み付き、上目遣いで媚びるように皇帝を見る。

皇帝は思わずリエナを振り払いそうになるが、腕を必死に押さえて耐えていた。

「……今日の宴はこれで」

皇帝はついに忍耐力が限界に達したようで、眉間に青筋を立てながら会場を後にした。

今日の宴は、我ながら天晴れの結果となった。

「……てな感じだったの」

「素晴らしいですっ！！さすがリエナ様。陛下もイチコロですね」

そんな会話を交わしながら、リエナはするりとウィッグを外した。その下から出てきたのは見事な黒髪。日本人なら、誰でも持つ色だ。リエナは肩に僅かにかかるくらいの真っ直ぐな髪を弄ぶ。

「ウィッグって、蒸れるのよね」

実は、隣国では黒眼黒髪は巫女である証拠とされ、神の使いだなんだと持て囃されている。巫女なんて死んでも御免なので、ウィッグや髪を染めることで隠している。

因みに瞳はカラーコンタクトで誤魔化している。

さらに、リエナは分厚い化粧も落としていく。別にしたくしてしているわけじゃない。

……だって、皇帝の嫌いな女ベスト10に、この条件が入っているのだから、仕方ないのだ（リエナ・リサーチより）。

リエナは、皇帝の嫌いな女性を演じることに情熱を注いでいた。

普通にひっそりと暮らしていれば良いではないか、と思うが、皇帝が好むのはそんな慎ましく大人しい女性だ。

リエナは後宮で暮らしているが、皇帝に身を捧げる気も、ましてや愛を捧げる気など欠片もなかった。

だが残念なことに、後宮の女たちの大半が陛下の『嫌いな女』の条件を満たしている。

つまり、これくらいの努力では所詮“並”にしかないのだ。特定の女性がいない皇帝が、たまたまりエナの所へ来てもおかしくない。

リエナが目指すのは、『皇帝が大嫌いな女』なのだ。それこそ、自分の部屋を訪れる可能性が0になるくらいの。

今日の宴では、一番癢に触った女になれたに違いなかった。

「これで皇帝陛下のお渡りは当分避けられそうですね」

「そうね。明日はゆっくり書庫にでも行きましょっか」

二人は明日待ち受けている幸せな日々を思いを馳せる。

「あとはお風呂に入って眠るだけだから下がって良いわよ。明日は一日中読書に明け暮れるつもりだから、しっかりと目を休めないからね」

こうして宴の夜は更けていった。

後に、不幸な事態が待ち受けているとも知らずに。

2・皇帝初訪問

リエナは快適な生活を送っていた。
毎日朝から晩まで異世界転移に関する本を読み漁る……これほど幸せな時はない。

陛下が訪れないとわかっていると、安心できるわ〜。

なにせ、陛下が来るとわかれば、後宮の女は大変だ。
大量にあるドレスの中から自信のある一枚を選び出し、化粧や髪型はいつも以上に侍女がよりをかけ、準備には途方もない時間がかかる。

もちろん後宮の女性たちは皆、皇帝がいつか自分の所へ来てくれると信じて疑わないので、日々の身嗜みには余念がないのだが。
リエナはそんな面倒なことはしたくはないのだが、皇帝は無駄に着飾る女は嫌いなので（リエナ・リサーチより）一応そうしている。

「あ〜、平穩ね〜」

「そつでございますね〜」

……そんな呑気な日々を送っていたある日のこと。

「たっ大変です、リエナ様!!!」

朝早くから侍女のアリーが慌てて部屋に駆け込んできた。

「皇帝陛下がいらっしやるようです!!!」

「いつ？」

「今日のお茶の時間に。最近毎日、女性のもとを順に回っているよ」

「は、は、ご機嫌とりなわけだ。」

「皇帝の訪門がないことで後宮の女性が不満を言い始めているのは知っていた。」

「だが、女を嫌う皇帝はずっと後宮に行くこと……特に夜の訪いを避けていた。」

「最近後宮に行かないことで大臣側からも苦情の声があつたらしく、皇帝もしぶしぶ動いたのだらう。」

「政治に関しては優秀な皇帝陛下だが、世継ぎを残すという点においては優秀ではなかつたようだ。」

「あんなに好き嫌いが激しいようでは一生皇妃を娶ることなんて無理そうだ。」

「女の醜い争いが嫌いだというのに、正妻がないせいで側妃や妾の間での争いが激化し、さらに大臣から自分の娘を後宮に送り込まれる羽目になるのだ。そのことを皇帝は本当に理解しているのだらうか。」

「取り敢えず、準備に取りかかるわよ！」

「はい、リエナ様！」

ついに、自分の努力の成果を発揮する時が来たのだ。

実は、リエナは皇帝に関するあらゆる情報を調べ上げている。調査はもちろん今も続行中だ。あらゆるもの……ということは、内容は私的なものにまで及ぶ。それこそ、好きな食べ物から誰も知らないような習慣まで、全て……だ。

皇帝に関するありとあらゆる調査の成果……それこそが、リエナ・リサーチなのだ。

「さてと、何を仕掛けようかしら？」

リエナは笑みを浮かべた。

一時間程かけて、部屋の全ての模様替えが完了した。派手で、無駄にお金をかけた、金色に輝く調度品。品の欠片もない壁紙。ちなみに、精巧な細工が施されたものはNGだ。陛下は芸術品には目がないので。

「よし、模様替えはばっちり終わったわ。あとはお化粧と髪とドレスだけね」

「リエナ様、ドレスはこれに致しましょう!!」

アリーが差し出したのは、余りにも派手すぎて配色のおかしなドレスだった。セットでアクセサリーも選んでくれている。

「素晴らしいわ、アリー！やっぱりアリーは最高ね」

「リエナ様こそ素敵です！」

そんなやりとりをしながらも、リエナの手は止まらず、着々と準備を進めている。

リエナはカラーコンタクト（地球産）をはめ、厚化粧を施す……それこそ、肌が窒息しそうなくらいに。

「もったいないですね。こんなお化粧はリエナ様には似合いませんのに」

リエナはなるべくこちらの顔立ちに似せるように工夫していた。

リエナの変わった容姿は目立つ。些細なことから自分の素性を疑われるわけにはいかない。

「さて、戦闘準備完了ね」

リエナは最後にウィッグ（地球産）を装着した。

「行くわよ、アリー」

「はい！ー！」

リエナとアリーは皇帝を迎えるために来客用の部屋へ向かった。

「陛下がいらっしやいました」

アリーが静かに来訪を告げた。

「まあ、陛下！いらっしやいませ」

リエナは皇帝に駆け寄り、そう告げる。

部屋に入った途端、皇帝が顔をしかめたのが分かった。

部屋の至るところが、金。調度品も金色。豪奢というか、欠片も品の感じられない部屋は、眩しいくらいに輝いている。

「じゅっくりしてって下さいませ」

そう言って、上目遣いに皇帝を見上げると、皇帝は眉をぴくりと動かした。

「どござ」

お茶と共に、お菓子も差し出した。

しかし、皇帝はなかなか口をつけようとしない。ちらりと目をやっただけで、あとは無言で座っているのみだ。

それにしても、美形ね。

藍色の髪に、同じ色の瞳。その顔はもの凄く整っているが、中性的ではなく男性らしい顔立ち。均整のとれた体つきは、毎日の剣の鍛練の証拠だろう。

これなら、たくさんの女性が集まってくるのも頷ける。……性格だけ見るとあまりよろしいとは言えないのだが。

「陛下、どうぞ召し上がってくださいませ？」

「ああ」

リエナは勧めるが、皇帝は一向に手をつけようとしな

当たり前だ……全て皇帝の苦手なものだから。紅茶は皇帝の嫌う濃厚な甘い香りがするもので、お菓子は皇帝の嫌いな果物入り。

皇帝はやっとのことでお茶を一口含み、カップを置いた。その後、互いに無言の時間が続く。

リエナが口を開こうとした時、ふと皇帝が小物を置く棚の方へと目を向けた。

「あれは、お前が読むのか？」

リエナがそちらに視線を向けると……。

やばい！！……片付けるのを忘れていた。

室内の様様替えばかり考えていると、自分の部屋は少し完璧とはい難いぐらいに物が乱雑に置かれていることを失念していた。

アリーがほとんど片付けてくれているようだが、棚の貴重な資料には手を触れないようにしているから、そこには何冊かの本が積み重ねたままになっていた。

積み重ねた本の一番上には、古代史の本が置かれていた。

……過去に異世界から来た者がいないか確かめるための。

やばい、というのは、皇帝は自分の妻となるに相応しい賢明な女性を好む。

自分が賢いとはこれっぽっちも思わないが、一般的な貴族の子女は

こんなもの読まない。

さらに言うと、皇帝は古代史が好きだったような……。

終わった。

自ら平穏な生活に終止符を打つ形となってしまった。

「そんな、私が読むわけ……」

言い訳してみるが、皇帝は解っている、といった風に優しげな目でこちらを見ている。

「令嬢はそんなもの読まないが……俺は良いと思うぞ」

そのまま皇帝はご機嫌な様子で帰って行った。

「リエナ様……」

侍女のアリーが気遣わしげに声をかけてくる。

「アリー、ごめんなさい。せっかく頑張ってくれたのに……」

「そんなことないです、リエナ様は頑張りました!!」

だが、自分の計画は半分もいかないうちに台無しになったのだ。

「次もまた来るのかしら……」

.....ん、次？

また皇帝が来る　リエナ・リサーチ使える　皇帝に嫌われる好機。

「そうね、次に頑張れば良いんだわ！！今日の挽回をする機会があるじゃない！！」

「そうです、次に向けて頑張らしましょう！！今回よりも、もっとすごい計画を考えましょう！！」

こうして二人はまた、皇帝に嫌われるための努力（ここまで来るともはや嫌がらせ）に勤しむのだった。

2・皇帝初訪問（後書き）

こんにちは、作者のばにえです。

白銀の華を読んでくださっている方、非常に申し訳ございません。

正直、こんな駄文書いてないで白銀の華を更新しろ、と思っただけでしやる方もいるかもしれません。

この作品は、満員電車の中ですることのない作者が暇潰しも兼ねて書いているものです。

白銀の華の執筆は少しずつですが進んでおります。何故投稿しないかと申しますと、第一話が書けていないからです。

取り敢えず頑張ります。ダメダメな作者を見捨てないでくれると嬉しいです。

3・打倒！皇帝計画再び

今、あり得ない光景を見てしまった。

宰相は、皇帝が上機嫌で執務室に戻って来たことに目を丸くしていた。

……先程は確か、後宮訪問の予定ではなかったか。

いつもの陛下であれば、女性と対面した後は手がつけられないほど機嫌が悪い。人に当たる、物は壊す、最終的には怪我人が出て大騒ぎになることもしばしば。

いつも女が嫌いだ何だと言っていた陛下が、女性に会って嬉しそうに帰ってきた。

これ以上の奇跡があるだろうか。

「陛下、何かあったのですか？」

宰相はついに、好奇心に負けて尋ねてしまった。

「後宮に、面白い女がいた。あんな女性は初めてだ」

それだけ言うと、皇帝は書類を手に取り執務に取りかかる。

面白い女がいた。

そんな言葉を皇帝から聞いたのは、初めてだった。

女性には、政治よりも容赦がない陛下。女性の好みはと聞かれ、自分の政務を手伝えるくらい聡明で、自分の背を預けられるくらい強

い女性。それでいて性格は大人しく慎ましやかな者が良いのだと答えた。

そんな完璧人間どこにいるのだ、とつつこみたくなるが当の皇帝は至って真面目である。

そんな理想の女性像を持つ皇帝は、どんな美女が寄って来ようとも見向きもしなかった。

最近、女性の本性を知り徐々に妥協が見られるようになってきたが、その皇帝が興味を持った人とはどのような女性なのか。

「その方は、どこの家の令嬢なのですか？」

「知らない」

「……………は？」

「知らないと言ったのだ。彼女は名乗らなかったしな。宰相、調べといてくれ。茶色の髪と瞳を持つものだ」

名乗らないのは当たり前だ。まさか頭脳明晰な皇帝陛下が、興味がないからと言って後宮の女性の名前さえ把握してないなどとは思わないだろう。

嬉しそうな皇帝に、その情報だけではどなたか調べられませんとは口が裂けても言えそうにない。

皇帝は、素性も知らない女性を好きになったのか。まさか、他国から送り込まれた間者などではないだろうな……………早急に調べねば。

「あと、古代史の専門書を手配してくれるか？彼女に贈ろうと思う」
あの陛下が、女性に贈り物……。

感極まった宰相は、（素性がはつきりすれば）敬愛する皇帝陛下を全力で応援することを誓った。

陛下が初めて興味を持った女性は、古代史の好きな方でした。

「リエナ様、陛下がいらっしやる日が決まったようです。」

朝食の片付けから嬉しそうに戻って来たアリーを、リエナは待ちわびていたと言わんばかりに迎える。

「本当に？いつなの？」

「明後日です。時間は以前と同じようです」

以前と同じ……これは、好都合だわ。朝のうちにしっかり準備して、全力で迎え撃つー！

「頑張りましょう、アリーー！ー！」

「はい、早速ドレスを選びましょうー！ー！」

こうして二人の打倒！皇帝計画が前よりさらに綿密に練られていくのだった。

4・計画成功！？でもやりすぎたかも…

ついに、陛下の訪問の日だ。

「行くわよ、アリー！」

「はい、リエナ様！」

今日は徹底的にやるつもりだ。それはもう、徹底的に。

こんなことまでして不敬罪に問われないのかと思うかもしれないが、あの陛下のことだ、おそらく悪意のない、しかも小さな嫌がらせに對しては激しく怒りこそすれ、罰則は与えないだろう。たぶん二度と会っては貰えないだろうが。

「いらっしやいませ陛下。私、心待ちにしておりましたのよ？」

笑みを浮かべながら陛下がソファに腰を下ろすのを待つ。

そしてリエナは、皇帝が来るのを心待ちにしていたこと、その間どれほど寂しかったか、さらには皇帝の訪いに備えてたくさんのおドレスやアクセサリーを新調したことを長々と嫌がらせのごとく語った。

「陛下、申し訳ございませんでしたわ。お茶をどうぞ」

そろそろ喉が渴いたのであろうタイミングで出てくるのは、またもや皇帝の嫌いなお茶。

皇帝は全く手をつけようとせず、静かにリエナの方を見ていたかと

思うと、その端正な顔に笑みを浮かべた。

うわ。こんな表情初めて見た。

普段にこりとも笑わない皇帝が笑みを見せた。

……て、一度しか会ってない女に心を許しすぎではないか？

油断も隙もないと思っていた皇帝だが、女に対しては隙だらけだ。

……この国の将来がとて心配になってきた。傾国の美女とやらが現れれば、この国は崩壊しかねない。

自分は関係ないが、大切な公爵夫妻に迷惑がかかるのは避けたい。国が潰れたときには逃げるのだけは手伝ってあげようと思うリエナであつた。

そんな思考から現実へと戻ってくると、自分の目の前に何かが差し出されていることに気付く。

「驚いたか？贈り物だ」

皇帝の手にあつたのは、古代史の専門書だった。

欲しい！物凄く欲しい。

だが、そんな素振りを見せるわけにはいかない。

リエナはそれを受け取ると、全く興味がなさそうにサイドテーブルに置いた。

皇帝の眉がびくりと動く。皇帝は完全に気分を害したようだ。

ここで一気に皇帝を怒らせてしまおう。

「ありがとうございます。皇帝陛下に贈り物を頂けるなんて……ですが私、もっと欲しいものがあるんですの」

そう言って、皇帝に手を伸ばす。その腕に触れると、媚びるような視線で皇帝を見つめる。

「今日の夜も……来ていただけませんか？」

皇帝は怒りの形相でリエナの手を振り払い、ソファから立ち上がった。

「お前が、そんな女だとは思わなかった。幻滅した」

皇帝は冷たい視線でリエナを射ぬく。その後に、侮蔑の表情を浮かべると扉の方に歩き出した。

とどめの一撃!!!

「お待ちください、陛下」

リエナは皇帝を引き留めるために袖を掴んだ。

「次はいつ来てくださるの？」

ばんっ!

リエナの体に激しい衝撃が走る。

「愚かな女だ。俺に殺されることを光栄に思え」

皇帝は、嘲笑を浮かべると扉を閉め、去って行った。

「いったく」

皇帝によって壁に叩きつけられたリエナは、よろよろと立ち上がり、振り返った。

「どうするのよ、これ。壁が壊れちゃったじゃない」

リエナが先程までいた場所には、大きな穴が空いていた。さらに周りにはヒビが入っている。

リエナはすぐに立っていられなくなって、すとその場に座りこんだ。

頭からは紅い鮮血が流れている。骨も何本か折れているに違いない。

「リエナ様！血が……」

アリーが慌てて駆け寄ってきた。その目には、涙を浮かべていた。嗚咽を漏らしながらも、リエナの怪我の手当てを必死に行う。

リエナはぱさりとウィッグをとった。

「皇帝……絶対、許さないわ」

「あれ、陛下。もう帰っていらしたのですか？」

お気に入りの女性のもとに行っていた皇帝は、短い時間で帰ってきた。

「俺が馬鹿だった。後宮にまともな女など、いる筈もなかったのに」
皇帝は自嘲的な笑みを浮かべた。

「古代史が好きな振りをしていたのは、俺に気に入られるための演技だったらしい」

やはり、皇帝のお気には召さなかったか。

「あの女、穢らわしい手で俺に触れやがって。まあ、もう生きていないと思うがな。魔法を使ったから」

皇帝が、魔法を使った。それは、死を意味する。皇帝の強すぎる魔法を受けて生きていた者など、未だかつていない。

宰相の顔が途端に蒼白に変わる。

「なっ、陛下、有力家のご令嬢だったらどうするつもりです？」

「そもそも賢い家なら俺の性格を知っているから、女を送り込むような真似はしない。馬鹿な貴族の家一つぐらいだったら、どうとでも出来る」

その通りなのだ。

皇帝の信頼する優秀な臣下たちは愚かな真似をして皇帝の気分を害するようない。

特に、公爵家は皇帝から絶大な信頼を得ている。普段は温厚な性格だが、皇帝に匹敵する手腕を持っている。宰相は、彼が敵ではなくて良かったと皇帝が言っていたのを思い出す。だが、現当主は皇帝を認めており、臣下として全力で彼を支えている。

彼の家に令嬢がいたらと何度願ったことか。

「取り敢えず、念のために彼女のことは調べておきます」

こうして、皇帝の二度目の訪問は幕を下ろした。

5・リエナの目標は皇帝陛下への嫌がらせに変更されました

怪我をしてからは大変だった。骨折は肋骨一本だけなので助かったが、頭の怪我をどうしようか。

黒髪を隠すためには宮廷の医者に診て貰うわけにもいかず、かといって魔法が禁止されている後宮で魔法での治癒はできない。止血と消毒は行っているものの、適切な治療が受けられず傷は開いたままなので、回復はかなり遅くなりそうだ。

「この怪我では夜会は当分欠席するしかないわね」

「そうですね。陛下も、あそこまでやらずとも…」

アリーがリエナのあまりに酷い傷に痛ましい表情を浮かべながら、
呟く。

今は部屋の中で黒髪のまま頭に包帯を巻いて過ごすことが多くなっていた。もちろん、人に会うときはその上にウィッグを被る訳だが、蒸れるウィッグは、頭の怪我にはよろしくなさそうだ。

「アリー、その代わりに後宮の女性を集めた茶会をしたいの」

今まで茶会は自分から開くことなどなかった。自分が皇帝に嫌われるために茶会は関係ないと思っていただけからだ。誘われることは何度かあったが、王妃の有力候補の誘いだけ受けて、後は人間関係に波風が立たない程度に放っておいた。

「茶会…ですか？お怪我をなされていますのに」

アリーが心配そうに問う。

実際これは重傷だと思うが、以前はこんな怪我はいくらでもしていた。……もつとも、そんな時はすぐに治癒魔法で治すことができたのだが。

「夜会に出席できない分、他で補わないと。あの陛下、どん底まで突き落として人間不信にしてあげる」

アリーを泣かせた罪は重い。リエナにとって彼女は唯一無二の存在である。彼女を悲しませたことは、万死に値する。

既に「皇帝に嫌われること」から「皇帝に嫌がらせをすること」に目的が変わっているのだが、リエナは気付かないふりをする。

「さすがリエナ様！私、精一杯サポートさせて頂きますね！」

本気で気づいていない、純粹にリエナを応援するアリーの笑顔に、リエナは俄然やる気を出すのだった。

ある天気の良い午後のこと。中庭には少女たちの明るい声が響いていた。

「まあ、陛下はあのお茶が好きなんですの？」

「はい、逆に甘いものや癖が強いものはお嫌いだそうです。陛下は苦いくらいのものが丁度良いのです」

リエナは今、後宮の美女たちを集めて茶会の最中だ。陛下の理想の女性について指導しているのだが、令嬢たちはリエナの話を聞いたがり、側に集まって来ている。まさに両手に花の状態である。

皇帝陛下の反応が楽しみだわ。

今まで自分にとって嫌な態度しかとってなかった令嬢が、いきなり理想の淑女と化するのだ。しかも、後宮の女性全員が一気に。これ程気持ち悪いことはないだろう。

(皇帝の地位と美貌に)恋する乙女である令嬢たちは、素直に自分の話を聞いてくれる。非常に可愛らしい娘たちだ。

「リエナさんはなぜ、こんなことまで知っていらっしやるの?」

「ふふっ、秘密の情報網があるの」

柄じゃないけど、悪戯っぽく笑ってみる。自分でやっていて気持ち悪い。

「これから毎日お茶会を開くから、ご予定のない時はぜひ、参加してくださいませね」

「あれから、皇帝陛下の態度が変わりましたの」

「そうね、お優しくなっただわ」

「これなら夜の訪いもありそうね」

令嬢たちが、嬉しそうに語りながら頬を染める。

茶会を始めてから一週間、リエナの「陛下の理想の女性講座」は侍女などの噂で急速に広まっていき、茶会への参加希望者が殺到していた。

人数が急増した最初こそ困ったものの、リエナは一日に開く茶会の回数を増やしたり、令嬢の予定を聞いて全員が平等に参加できるようにしていた。

だが、他の女性を出し抜こうとして情報を金で買おうとする女性には、参加禁止にしたり厳しい対応をした。

リエナは今や完全に後宮を掌握している。

と、いつか、後宮にはどれだけ人がいるのよ。

後宮には、尋常でない数の女性がいた。歴代の皇帝と比べても、他国の王と比べても、半端なく多い。いくら興味がないからといって、後宮に入る女に制限くらいかけたらどうだ。おそらく皇帝は全ての女性を把握しきれないだろう。これでは、男が紛れ込もうと、暗殺者が紛れ込もうと絶対に気付かない。

思わぬところに皇帝の弱点を見付けてしまった。今ならだれが皇帝を暗殺しても、犯人は捕まらない気がする。皇帝は強いので、万一成功した場合の話だが。

皇帝といえば……。

そろそろ反応が気になるわね。今の状況をどう思っているのかし

ら？

その頃の執務室。

「宰相、最近後宮の女たちの態度がおかしいのだが」

「……は？それは、どのように？」

「態度に嫌悪を感じない。いつからあんな慎ましい女に変わったのだ」

皇帝は明らかに困惑している様子だった。

「それは良かったではありませんか。これを機に、本気で皇妃選定を考えて頂けると嬉しいのですが」

ついに、女性嫌いを克服したのか。宰相は、嬉しそうににこにここと笑みを浮かべた。

「だが、不審に思わないか？全員、あの態度だぞ？」

「……………」

確かに、いきなり態度が豹変したのは少し気になるところだ。今まで寵を得ようと必死に皇帝に手を伸ばしていた令嬢が、いきなり大人しくなった。これが意味するところは。

「しかも、食べ物や装飾も全て、俺の好みに合わせてあるのだが」

「……………」

なぜ、皇帝と接触がほとんどない後宮の者が皇帝の好みを知っているのか？裏の事情とかならまだしも、好きな食べ物や趣味といった私的な、しかも些細な内容だ。

「俺はどうも、何者かに俺の情報が流用されている気がしてならないのだが」

「私もそう思います」

しかし、そこまで皇帝の事情に詳しい者とは、一体何者なのか。

「陛下、後宮に親しくされている女性など、いらっしやいましたか？」

「……………いる訳ないだろう」

出入りの不自由な後宮の女性と接触できる者というに限られてくる。容疑者候補として上がるのは同じく後宮の女性なのだが、女嫌いの皇帝に限ってそれはない。というか、私的なことで皇帝に関わる者自体、自分以外にまずいないだろう。

「宰相。まさか、お前がしたんではないよな？」

「は？恐れ多くもそんなこと、陛下にできるわけないでしょう」

宰相は突然皇帝から疑いの目を向けられ、ショックを隠しきれない様子だった。

私が皇帝に疑われるなんて……。

宰相の表情に、皇帝は罰の悪そうな表情をした。

「すまない。その通りだな……。このままだと、だれも信用できない。このままでは信頼する臣下までも失ってしまうかもしれないな……」

皇帝をよく知る者がこの情報を流しているのだとすると、その者は皇帝の女嫌いを知ってているに違いない。これは、早急に捜査を始めなければ。

「宰相、すぐに情報を集めてくれ。犯人の手で重要な情報が表に出る前に犯人を捕まえろ」

「御意」

かくして、犯人探しが始まったのだった。

6・犯人は逃亡しました

「陛下、私最近語学を勉強し始めましたの」

「……………」

いらいらいらいら。

「私、陛下のお好きなお茶をお持ちしましたわ」

「……………」

いらいらいらいらいらいらいら。

「陛下、私例え財と地位全てを失おうとも、陛下に生涯お仕え致します」

「……………」

ぷちっ！

いい加減にしてくれ！！誰だ、俺の個人情報流している奴は。

ついに堪忍袋の緒が切れた皇帝。

だが、それを隠しつつ、令嬢に優しく話しかける。その穏やかな表情からは、いつもの女性に対する冷たさなど欠片も感じさせない。

「最近、変わったな」

「何か、陛下のお気に障りましたか？」

令嬢が恐る恐る問う。

ちなみに、これもリエナ仕込みだ。この場面で、そうです私とっても綺麗になったでしょう陛下などと言うのは、皇帝の理想に反する。皇帝は控えめな女性が好き（リエナ・リサーチより）なので。

「いや、とても綺麗になった」

皇帝は全ての美姫を魅了する笑みを浮かべて言った。思い通り、令嬢は顔を赤らめて俯く。

「その……陛下のために努力致しましたの」

「俺の好みまで把握してくれているとは、嬉しいものだな。こんなことまでどうやって調べたんだ？」

「はい、最近陛下に身も心も尽くしたいという者で、茶会を開いておりますの」

茶会……そこに、この後宮全体を巻き込んだ事件の手がかりがあるのだろうか。

「リエナ様、効果は絶大のようですよ！！」

アリーが先程令嬢と面会を終えた皇帝とすれ違ったようだが、とてもイライラしていたらしい。

リエナも最近皇帝を見かけたが、幾分か疲れているようだった。こ

の作戦が効いているのだと期待している。あの姿を見た時は二人で喜んだものだ。ささやかだが、お祝いのパーティーまでしてしまっ
た。

「ですが、陛下もそろそろ捜査に乗り出しているようです」

「そうね、潮時かしら。そろそろ怪我を理由に実家に帰らせて貰おうかしらね」

実は、怪我の治りが良くない。一向に回復の兆しはなくいつ体調を崩すかわからないのに、これ以上後宮にいるのは危険だ。貧血で倒れて後宮の医者に診察してもらうなどという馬鹿な事態はなんとしても避けなければならない。

「それに、資金調達しなきゃまずいしね」

リエナの後宮での生活資金はすべて自腹だ。公爵家に出して貰っているとかではなく、本当に自分で稼いでそれをドレスなどに費やしていた。公爵家にお世話になっている間に必死に稼いだお金だ。それがこんなドレスに消えていくかと思うと、涙が止まらない。

さて、この事実がバレてしまうと皇帝の「慎ましい女」に当てはまるわけだが、そこは心配いらぬ。後宮の女性には後見というものが付いていて、お金はそこから出して貰う女性も多い。だから、後宮のお金を使用していなくても、お金を使っていないと判断されることはない。

さすがのリエナも、国庫を減らすような大それたことはしない。それをしたら皇帝は困るに違いないが、一番に被害を被るのは国民だ。仮にも公爵家の一員として、民は大切にしなければならぬ。

「じゃあ、私は申請して参りますね」

アリーは公爵家に帰れる嬉しさに、部屋を飛び出して行った。

申請を終えたアリーが息を切らして戻って来た。「リエナ様！」と言いながら勢い良く扉を開け放つ。

またか。今度は何が起きたというのだ。アリーは優秀な侍女だと思うが、もう少し落ち着いて行動して欲しいものだ。

「リエナ様、びっくりな話があるのです！！なんと、リエナ様死んだことになっているみたいです」

「……………は、どういうこと？」

「陛下の魔法を受けて死んでいるそうです」

どうやら、私は死んでいるらしい。だが、よく考えたら生きている方がおかしいのだ。皇帝の藍色の髪は神に近い色とされ、神の加護があるらしい。神の加護とは、具体的に言えば強い魔力を持っていることだ。つまり、普通に考えれば、皇帝の尋常でない魔力で攻撃を受けて生きているわけがない。

「それって、里帰り申請出来ないんじゃない？」

まさかの事態に顔を青くするが、それは杞憂に終わった。

「大丈夫です。普通にできました！！」

どうやら、後宮の管理はとってもいい加減らしい。あの皇帝のことだから出て行く者は勝手に出て行けとでも思っているのだろう。大丈夫か、この国は。

「ま、帰れるならいつか」

これなら実質いないことになってるから出入りも簡単だし、夜会の出席も自由だ。

なんと言っても最大のメリットは、情報収集に気を遣わなくて良い点だ。もし何らかの失態を犯しても、死んでいる者は捜査対象に含まれない。現に今、皇帝は情報を流した犯人を捜索中だが、たぶん特定されることはないだろう。

つまり、リエナにとって困ることなど一つもない。むしろ良いことづくめだ。

「じゃあ、早速里帰りの準備ね」

準備といってもそれほどすることはないが。ドレスは一度着たら売っているし、大事なものは全て公爵家に置いてある。

「そうですね。リエナ様、帰ったらマシな服を着ましようね」

二人とも、目に痛い色合いのドレスを見ることも、金の調度品を見ることがもう、うんざりだった。

こうして、皇帝に気づかれぬまま事件の犯人は逃亡に成功した。

6 ・ 犯人は逃亡しました（後書き）

とてもたくさんの人に読んでいただけて嬉しいです。これからもこの作品をどうかよろしくお願いします。

7・帰郷の目的

「まあ、お帰りなさいリエナちゃん」

公爵家に戻ると、奥様が温かく出迎えてくれる。リエナをぎゅっと抱きしめ、その頭を優しく撫でた。

「ただいま帰りました、奥方様」

リエナも抱擁を返し、にこりと笑った。

「もう、お母さんと呼んでって言うてるのに」

口を尖らせてそう言う奥方様は、本当の家族のようにリエナに接してくれる。

異世界トリップ後、誰も信用できなくて荒れまくっていたリエナを当主が保護し、奥方様が世話をしてくださった。

奥方様は、リエナが使用人を警戒し近付けようとしないうことを知ると、自らリエナの世話を買って出て一生懸命心を通わせようとした。あの時の恩は、一生かけても返せないくらいだ。

「ああ、久しぶりだなリエナ」

低くて心地の良い声にリエナが振り返ると、そこには綺麗な容姿の男性が立っていた。

「お久しぶりです、次期公爵家当主様」

彼は普段家にいないのであまり接したことがないが、リエナが養女として公爵家の一員になったときは心から喜んでくれた。彼は王城で働いているらしく、後宮にいるリエナをサポートしてくれる。

「せっかく家に帰ってきたのだから、ゆっくりしていけ」

「はい」

リエナは自然に笑みを漏らした。

「宰相、犯人の情報は？」

皇帝は、執務室に戻ってくるなり宰相に問う。

「ありません」

舌打ちした皇帝に、宰相は眉をひそめた。

そもそも後宮など放っておくと命令した皇帝が悪いのに、自分がこんな態度を取られる理由はない。

全く情報がない状況から、果てしない数の女性のことを調べるといふのは、どんな優秀な者でも無理だ。せめて、後宮に入った貴族の令嬢の情報だけでも管理しておいて欲しかった。

「陛下こそ、茶会に犯人がいると仰って自信満々でいましたね？」

「いなかった。誰も主犯格らしき者は見つからなかったのだ」

皇帝は、イライラしながら机を叩く。

誰か率先して情報を提供している者がいたかと問われれば、否だ。茶会は確かに令嬢の情報交換の場ではあるものの、飛び交う情報に不審な点はない。

もしくは出席していなかったのか？だが、たまたま出席していないのか、それとも皇帝自ら茶会に来ると知って身を隠したのか。後者だとすれば非常に厄介だ。

「陛下、何か恨まれるようなことをした覚えは？」

宰相が何か思案する風にして顎に手を当てながら尋ねた。

「この地位にいる限り恨まれることなどいくらでもある」

馬鹿馬鹿しい問いだ、と言わんばかりに皇帝が答える。

「そうではなく、個人的に恨まれるようなことをしましたかと私は聞きたいのです」

「……………何？」

「例えば、先日亡くなられた令嬢のご家族などは？」

あなたに娘を殺されたこと、とても怒っているかもしれない
せんよ？

「まさか……………」

そんなはずは…。そもそも、死体処理もされたかどうかかわからないのに、当家に令嬢の死亡が伝わっているだろうか？

「こんな後宮で情報が漏れない方がおかしいです。興味のない陛下はご存じないかもしれませんが、現在の後宮の管理体制は皆さんのものです」

宰相が呆れたように言った。

「なぜ、それを早く言わない？」

皇帝がジロリと宰相を睨む。

「何度も進言しましたが、聞く耳を持たなかったのは陛下のほうでしょう」

完全に皇帝の管理下にある後宮だけは、宰相が干渉することはできない。政治ならある程度は皇帝に内緒で手を打つことも可能なのだが。後宮に何か問題があれば宰相は、皇帝に進言するしか方法は無いのだ。

「まったく面倒な……。後宮を廃したいくらいだ」

「犯人が見つかるまで我慢して下さいね」

「それで……リエナちゃんは何で帰ってきたの？」

奥様がにこにこしながら尋ねてくる。

ここは、公爵邸の中庭だった。奥様に長男、さらに仕事を終えて合流した当主も加わってお茶会が開かれている。

「ちょっと……家族に会いたくなって」

「嘘だろう。いつからそんな可愛らしい性格になったんだ？」

「嘘ね。リエナちゃんは一刻も早くもとの世界に帰りたいたいと思ってるのに、余程の事がないと帰ってこないわ」

「リエナ、正直に言いなさい」

……すぐにバレてしまいました。何でわかるんだ？

「えっと、その……療養のための里帰りです」

「療養？どこか、悪いのか？」

当主様の厳しい視線に耐えられなくなり、リエナは俯いた。

「アリー、説明なさい」

「はい、えと、あの……ですね、……リエナ様が……」

いきなり話を振られ、アリーはあたふたする。口からでる言葉は、途切れ途切れで文章になっていない。

「父上と母上、二人が怯えていますよ。……で、結局どこが悪いんだ？」

追い詰められてうまく言葉の紡げないリエナとアリーに次期当主が助け船を出す。その瞳は優しげだ。

「頭です！頭が悪いんです！」

「」「」「」

完全にテンパったアリーの発言のせいで、その場に何とも言えない空気が漂う。

「アリー、嘘つくなら、もっと上手くやりなさい」

奥さまから同情の視線。

「違います。そうではなくて……」

ふいに、長男が席を立った。

ぼすっ。

「……………あ」

彼の手には、リエナの茶髪ウィッグが。彼女の艶やかな黒髪と、真っ白な包帯が現れた。包帯には血が滲んで非常に痛々しい。

「父上、魔術師の手配を……」

冷静沈着な息子は、治癒のために魔術師を呼ぼうとするのだが……。

「きゃー、リエナちゃん！！酷い怪我よ」

「大怪我じゃないか！！医師を、いややっぱり、領内で一番の腕の医師を」

茶会はあっという間に大騒ぎになってしまった。

「……で、結局どういことなの？」

治療を終えたりエナに、奥方様が詰め寄ってきた。まるで肉食獣が獲物を狙うかのように、その目は鋭く光っている。

リエナはついに観念し、今までの経緯を洗いざらい話した。それはもう、何から何まで事細かに。

「ふうん。皇帝陛下ってそんな性格なんだ」

お、奥様……目が怖いです。

「それにしても、女の子殺そうとするとはねえ」

奥方様が怒っています。

このままだと、彼女が皇帝に逆襲するのは目に見えている。自分としては穏便に事を収めて、静かな後宮生活に戻りたい。このままでは、折角いないことになっていたはずのリエナの存在が知られてしまう。

「お、奥方様！その、私も皇帝陛下を怒らせるような真似をしたのが悪かったですし」

「リエナちゃんは心配しなくて良いのよ。ちゃんと被害が及ばな

いようにしてあげるから」

「そうではなく……」

「ちょっとお仕置きしてあげましょう」

にっこりと微笑んだ奥方様の顔は、美しくも怖かった。

8 ・ お金は何より大切（前書き）

すみません、現在期末レポートを一日に3つ以上仕上げなければならぬ地獄の状態ですので、次回の更新は遅くなります。

8 . お金は何より大切

ここは、悩める男二人が集う執務室。

はあ……………。

二人同時に溜め息を吐き、顔を見合わせた。

「陛下、最近公爵家からの風当たりが強いのですが、心当たりは？」

「奇遇だな、俺もそのことを考えていた。宰相こそ、心当たりは？」

皇帝は疲れたような表情で、宰相に視線を向けた。

「さあ、わかりません……………ですが、私たちは余程のことをしたようですね。最近、殺気を感じるのですが」

「そうか。俺は最近、護衛に暗殺者を野放しにされているのだが。何度襲われかけたか」

二人とも、辛い経験を思い返して遠い目をしている。

宰相は、今後のことを考えると頭が痛くなりそうだった。

公爵家を敵に回したということは、これからの日々が容易に思いやられる。たぶん、自分は陛下共々屍になっているかもしれない。いや、王位を篡奪されて無人島に追放されるかもしれない。それとも……………。

はあ……………。

また二人揃って溜め息を吐く。

宰相と皇帝は今までにない事態によって、精神的に追い詰められていた。

「くそつ、逃げるぞ」

分が悪いと判断をしたリーダーらしき男は、手下の者たちに指示を出す。

「逃がさないわよ、覚悟しなさい」

リエナはお金稼ぎのために町に繰り出していた。

今日の仕事は町で暴れているゴロツキの捕縛だった。どうやら、意外に強いらしく地元の警備団では相手ができなかったらしい。彼らは、強盗、恐喝、暴行、窃盗などの罪を犯しているらしく、結構名が知れている。

リエナは逃げようと背を向けた男たちを見て、笑った。

男たちは、リエナの笑みの意味など何も知らずに走り出すと……

「うわああああああ!!」

男たちから悲鳴が上がる。後ろにいるリエナに気をとられていた男たちは、まさに前方不注意の状態で、それが彼らにとっての命取りとなった。

「らつき。捕獲完了！」

リエナの目の前には、大きな穴がぽっかり空いていた。そして、その穴の中には泥まみれになった男たちの姿が。

「いや、助かったよ。あいつらなかなか捕まなくてさあ」

ここは、いわゆる傭兵ギルドというやつだ。正直、ブルジョアか？
つてくらいめっちゃ儲かる。仕事としては、商人の警護とか、盗賊
やら山賊やらの討伐……なんだけど、一番簡単なものだと、おつか
いとか掃除とか畑仕事とか害虫駆除とかそんなものまである。

「ほれ、今日の報酬だ」

手渡されたのは、何枚かの硬貨だった。

今日は病み上がりなので、簡単な仕事しか引き受けなかったが、い
つもは大量に依頼を受けて一日で大枚を稼ぐのが日常だ。

この調子なら、後宮のドレス代が十分稼げそう！

リエナはお金を貰うと、ほくほくとしながら帰途についた。

「ただいま帰りました」

リエナが帰宅すると、中庭から賑やかな声が聞こえてきた。どうや
ら茶会が行われているらしい。奥方様は家族を集めてよく茶会を開

いているから、おそろくそれだ。

「聞いてくれる？あの陛下、護衛が動いてくれなくて精神疲労が酷いもんだわ」

「うわあゝ。せつかくの美形が台無しですね！！」

アリーの声が聞こえてきた。なぜかアリーも参加しているようだ。

「先日は、暗殺者の攻撃を避けた際に転んでたね」

最近、暗殺者に加え、城に人をやって皇帝の様子を毎日報告させている当主様は語る。

「俺は、暗殺者と間違えて忠臣を殺しそうになった陛下を見た」

最後に、城勤めで皇帝の近くにいた次期当主が。

「……………」

私は、何か、非常に、まずいことを聞いてしまった気がする。
リエナは、聞かなかったことにして立ち去ろうとするが……。

「おかえりなさいませ、リエナ様」

「あらゝ。お帰り、リエナちゃん」

奥方様とアリーに見つかってしまった。

「リエナちゃん、さっきまで私たちねゝ、陛下のお話ししてたのよ」

……はい、知ってます。まさか扉の向こうで盗み聞きしていたとは言えないが。

「これならリエナ様も陛下に嫌われますね！」

その通りです。今まで、どれだけ自分のしていた事が生ぬるいか身を以て知りました。

「さてと、お仕置きはこれからね」

目を爛々と光らせている公爵家一家は、恐ろしいものでした。……あ、自分も公爵家の一員だった。

「リエナ、ちょっといいか？」

「はい、次の依頼ですか？」

貪欲に依頼を求め、詰め寄ってくるリエナに、ちょっと引きぎみになる男。

「ああ……ちなみに、報酬は今までの倍だ」

倍！……なんて魅力的な言葉！！！！

リエナの目はきらきらと輝いていた。

だが、次に語られることは、お金儲けで上機嫌なりエナを、地獄に突き落とすことになる。

「実は、皇帝陛下の護衛を頼みたいんだが」

「……………」

……やなことを聞いた。何だこの偶然。不幸としか言いようがない。

「東の町の方で視察があるらしくて、腕の立つものを寄越して欲しい」と

視察という、王宮の護衛官でも事足りる仕事をギルドに依頼したのはたぶん、公爵家のせいで護衛が役に立たなくなったからであろう。

「やっぱり、お断りします」

帰ろうと身を翻すりエナの腕を、男はさすがのように両手で掴む。

「頼む！！皆強いものが出払っていて、お前しかいないんだ」

「私と同レベルのランクの人なんて、いっぱいいるでしょう」

リエナはランクの昇格試験を受けていないし、簡単な仕事ばかりを好んで選んでいたためにランクはあまり高くない。

「言うておくが、実力的にお前に敵う奴なんぞ、そうはいないぞ。

それに、一番信用できるのは、お前だ」

「とりあえず、私はやりません」

「お願いだ！この依頼を成功させたら、お前に優先的に仕事を紹介

してやるから!」

リエナは目を見開いた。

ここで、頷いてしまったのは仕方がない。人間、お金の力には勝てないのだから。

たぶん、変装して行けばたかが妾の顔なんぞ皇帝は覚えていないだろう。……そう楽観的に考えていたリエナは、仕事を引き受けることにしたのだった。

9 . なんでじつなる!?

ついに皇帝の護衛に向かう時が来た。

リエナはいつものウィッグを外し、短い黒髪を金髪に染めていた……念には念を入れて眉も丁寧に染めた。さらに、魔力の質からリエナと特定されないために、魔力を完全に封じた。魔力というのは誰にでも備わっているものであり、たとえ微量だとしても魔力の才に恵まれた皇帝が気付かないはずはないのだ。

指定された場所に行くと、既に準備を整えた皇帝が。

いつ見てもキラキラしているなあ。

そんな感想を抱きながら皇帝の顔を見ると、不機嫌そうな様子が伺えた。……何故？

「お前がギルドから派遣された者か？」

「はい、ナツと申します。よろしくお願いします」

ナツとは、ギルドで使っている名前である。ギルドでは、ギルドだけで使う名前を持っている者も多い。

公爵家の皆にもとくに忘れられているであろう、夏川里菜という本名からナツにしたのだ。希望としては、男と勘違いして欲しいのだが。

「身分証明を」

リエナはギルドの身分証明を見せた。ギルドの身分証明は名前とランクが書かれている。

「ふん……やはりな。残念ながら、お前には帰って貰う」

皇帝の顔は厳しいものだった。

意味がわからずリエナが突っ立っていると、皇帝が理由を語り出した。

「俺が依頼したのは上位ランクの者だ。身分証明を見せてもらったのは、お前みたいな少年が上位ランクのはずがないと思ったからだ」

あ、そういうことか。てか、男装大作戦大成功。

不機嫌である理由がわかった。つまり、皇帝は、要求したよりも実力の低い傭兵をよこされたことに怒っているのだ。相応の金を払っているのだから、相応の腕の者をよこせ、ということだ。リエナだって、そんなことをされたら怒るに違いない。

だが、ここで引き下がるわけにはいかない。これを成功させれば、リエナは仕事の優遇が約束される。

「私を選んだのは、マスターです」

リエナはそう言い放った。

つまりは、他でもないギルドの最高権力者が選んだのだから、実力がないはずがないということをお願いしたいのだ。マスターはギルドを取り仕切っているだけでなく、傭兵として最強の実力を持っている。普段は傭兵として働いてはいないが。

さて、これで皇帝も認めざるをえないだろう。自分の言ったことは、

皇帝に対して非常に無礼な態度だとわかっている。しかし、ここま
で言わなければ皇帝を納得させることはできない。

「……わかった。だが、実力がないと判断した時点で帰らせるから
な」

皇帝がしぶしぶといった感じで頷いた。

今日は、商業都市の視察に行くとかで、日帰りの予定だ。そうでな
いとリエナは引き受けない。長期依頼は絶対に受けない。

護衛なのになぜか馬車の中に同行し、皇帝の傍に控えている。

「あの、外を見張らなくてよろしいのでしょうか」

「守りの要はお前だ。俺から離れていたのでは、いざという時間に
合わないだろう」

リエナが問うと、皇帝は親切にも答えてくれた。女性への態度とは
大違いだな、おい！！とツツコミたくなるが、押しとどめる。

先程の答えに、なるほど、と思う。今の皇帝の護衛は、公爵家のせ
いで役立たずだ。その者たちを身辺に配置して、リエナを見張りの
一人として外に配置しても意味がないわけだ。

こういう時は正常に頭が働くのに、女性のことになるとなんであんな
馬鹿なのかな。

失礼だがもつともなことをリエナが考えていると、どうやら敵が来たようだ。

リエナは皇帝の前に立ち、ナイフを構えて敵を待つ。護衛対象の位置を正確に確認しようと振り向くと、あるうことか皇帝も武器を構えている。

「陛下はお下がりください!!」

リエナが叫ぶが、皇帝は聞く耳を持たない。

「これでも腕は立つ」

くっ……このままでは、戦えない 訳はない。リエナ・リサ

イチのおかげで、皇帝の行動なんてとづくに予測済みだ。

さ、て、と。どの作戦で行こうかな。

リエナは敵の位置を確認する。屋根の上に一人、両サイドに一人ずつ。

皇帝の行動も手にとるようにわかるが、暗殺者の行動も簡単にわかる。

……だって、うちの暗殺者だもん。

これらは確実に公爵家当主が放った者たちだ。皇帝に対する嫌がらせは、まだ続いていたらしい。

それにしても、さすがにうちの者を殺すわけにはいかない。そんなことがバレた父に怒られることは明白だ。

リエナはナイフを2本ずつ交差させるように両脇に投げた。だが、

暗殺者たちはナイフを易々と避ける。ナイフは背後の木に刺さった。

「畏に引つかかったね」(一応少年口調を装う)

リエナの声に暗殺者たちは慌ててその場を動かこうとする。

「無駄だよ」

リエナが言うと、暗殺者の腕が突然朱に染まる。

実は、ナイフの柄からは殺傷能力の高いワイヤーが伸びていたのだ。そんなものすぐにわかりそうだが、よく見ないと視認は難しいという厄介な代物だ。木に縫い止められぴんと張ったそれは、人を傷つけるのには充分だった。

2人の相手をしている間に、皇帝の方にもう一人が迫っていた。リエナは身を翻し、皇帝と暗殺者の間に滑り込む。

キン、と金属の触れ合う音が響いた。

力で押してくる暗殺者の剣を、リエナは振り払う。

「ぐっ」

暗殺者が呻き声を上げる。

リエナのワイヤーが当たったのだ。

「おい、後ろ!!」

皇帝が声をあげるので振り返ると、先程の2人が武器を持ってリエナに襲いかかろうとしていた。

しかし。

「甘いね」

暗殺者は、その場でくずおれた。

ワイヤーには、痺れ薬が塗ってあったのだ。

ふふっ、作戦成功。

暗殺者は全員動けなくなっていた。だが、ほとんど傷を付けぬまま捕縛することができた。あれくらいの怪我なら仕事に復帰するのに時間はかからないだろう。

こうして、暗殺者の襲撃を見事に防いだのだった。

再び、馬車は目的地に向かって走り出した。

しーん。

馬車の中には沈黙が広がっていた。

一番身分の高い皇帝が喋らないのだから、自然と静かになる。襲撃の前までよく喋っていたのにどうしたものか、と思わなくもないが、悩んでも仕方がないので放っておいた。

「おい……お前、聞こえているか？」

襲撃者に備え完全に外へ意識を向けていると、皇帝の方から唐突に声をかけてきた。

何だろう、と訝しく思いながらそちらに視線を向ける。すると、皇帝は予測不可能な行動に出た。

「実力を疑ったりしてすまなかつた」

一瞬、何を言われたのか理解できなかつた。

謝った。誰が？

皇帝が。

「その、おやめください。皇帝陛下が謝罪するなんて

「いや、依頼者として、派遣された者の実力を疑うなど最低の行為だ」

リエナは慌てていた。今までにない皇帝の一面に驚くばかりで、いつもの冷静さなんて失いかけていた。

皇帝が、貴族の女性以外に対してなら理不尽な態度を取らないことは知っている。だが、後宮の女としてしか皇帝と接する機会がないリエナにとっては驚きだった。

「私たち傭兵は、依頼された仕事は必ず成し遂げます。自分の実力にながらず自負を持っているからこそ、私も貴方に対して失礼とも言える態度を取ってしまいました。こちらこそ、申し訳ありませんでした」

私も素直に謝った。

あちらが真摯な態度を見せるなら、こちらもそれを返す。

まあ、後宮での嫌がらせは事情が違っけどね。

「ナツは、素晴らしいな。実力もあるし、とても誠実だ」

「そんな、勿体ないお言葉でございます」

心にもないことを言ってみる。政治手腕は凄いと思うが、皇帝に皇族としての敬意は欠片も抱いていない。

「謙遜するな。俺はお前を気に入った。これからも頼むぞ、ナツ」

自分を評価してくれるのは純粹に嬉しい。例え、それが後宮では間違いないリエナの敵となる皇帝であろうとも。

つて、え

これから？

リエナの頭に嫌な予感がよぎった。

このあと、案の定ギルドのマスターから長期間の皇帝の護衛を頼まれることになった。

せっかくの里帰りがああああ

。

10・この状況は身に覚えがあります

長期護衛を任されることになったリエナは王宮に行くはめになっていた。

うつわく、自分で引き受けたとはいえ面倒臭い。

ギルドのマスターには、依頼を受ける代わりにギルドにおいてのさらなる優遇の約束をきっちり取り付けてきた。

さて、皇帝陛下の護衛を始めたわけだが……正直に、言おう。
……………楽しくて、仕方がない。

一日中皇帝に張り付いているせいで、皇帝のすべてがわかる。この情報は、リエナ・リサーチに書き込むしかない！！！！
後宮を抜け出して危険を犯しながら皇帝の観察に行くよりは、はるかに良い。護衛という立場を利用すれば、どんなに側で観察しても文句は言われない。

大いにリエナの打倒！皇帝計画に利用させて貰うつもりで、彼の一拳手一投足を凝視する。

そんなリエナを皇帝は不審に思っただらしい。

「何故、そんなに見つめている？」

「いえ、畏れ多くも皇帝陛下のお側にいる機会なんてないので、し

「つかり目に焼き付けておこうと」

嘘は言っていない。皇帝陛下のお側で、(リエナ・リサーチに有用な情報を)目に焼き付けようと思ったのは、事実だ。

そうすると、皇帝はふっと頬を緩めて笑う。

「良ければ、ずっと雇ってやるが？」

「それは都合上できませんので……」

そう、傭兵ナツの都合ではなく、後宮に戻るリエナの都合上無理だ。

「そうか、残念だな。お前のことを気に入っているのに」

皇帝は本当に残念そうに呟く。

「そういうことは、女性に仰られた方が喜ばれますのに」

軽く冗談のつもりで言っただつてもりだったが……。

皇帝を不快にさせてしまったようだ。

「女は嫌いだ」と呟く皇帝の顔には、女性に対する嫌悪と侮蔑の表情が浮かんでいる。

そういえば、皇帝は何故女性を嫌うのか聞いた(盗聴した)ことがなかった。リエナ・リサーチのためにもこの情報は重要だ。

「陛下はなぜ、それほどまでに女性を厭っていらっしゃるのですか？」

「俺は皇帝だ。負担になるだけの妃なんて必要ないと思わないか？」
それでは嫌いな説明になりません……………とは言えず、皇帝を見つめる。

「でも、それでは心が休まる時がございません。妾くらい側に置いて癒されてもいいと思います」

リエナの心の安らぎ（皇帝と顔を合わせなくてもいい）のためにも、特定の女性を作って欲しい思ったのだが……………。

「女では気が休まらない。いつ殺されるか、夜這いされるかわかったものではないからな。隙を見せられない中で癒されはしない」

そういうことらしい。どれだけ腹黒くても、見た目さえ可愛ければ癒されるリエナとは違うらしい。

「正妃であった俺の母は、早くに亡くなつてな。正妃の座を欲する側妃に命を狙われ続けたせいだ、未だに女を受け入れられない」

なるほど……………トラウマってことか。

うむうむと一人納得するリエナ。案外、皇帝の女嫌いは根深いようだが、正直なところ、理由が普通すぎてつまらなかった。これでは、リエナ・リサーチに使えない……………。

「さて、この話はおしまいだ。そろそろ休憩にしよう」

そう言ってペンを置くと、執務机からソファへと移動する。

「あ、俺がお茶を淹れます」

リエナは自らティーセットを用意し、紅茶を淹れた。良い香りが執務室に広がった。

茶菓子は侍女さんが持ってきてくれたようで、紅茶と一緒に並べた。

「お前、上手だな。すごく美味しいぞ」

「ありがとうございます」

やった！！皇帝に認めさせたぜ！！

実はこれ、公爵家の奥様から習ったものだった。紅茶を淹れる手順から、茶葉を蒸らす時間など丁寧に教えてもらったのだ。

「旦那様の紅茶くらい、自分で淹れたいと思わない？」と語る奥様は、時折家族にも紅茶を淹れてくれていた。そのせいでリエナの舌は、生半可な紅茶では受け付けなくなっている。

「おや、良い香りがしますね」

入室してきたのは宰相だった。仕事で部屋を出ていたのだが、戻ってきたらしい。

「宰相か。お前もどうだ？ナツの淹れた紅茶はうまいぞ」

「頂きます」

宰相は紅茶を口に含んだ瞬間、驚いた顔をする。

「これは……………美味ですね。完璧に紅茶の味と香りを引き出してい

る」

そこまでお褒めいただけるとは光栄だ。たかが紅茶のことだが。

「陛下、ナツを正式に雇用することを打診しましょう」

……………は？

冗談かと思ったが、宰相は大真面目なようだ。

皇帝が「宰相は紅茶が好きだからな」と笑いながら教えてくれたが、それにしても皇帝の側に置く者をそんな簡単に選んで良いとは思えないのだが。

「傭兵に心を許してはいけませんよ」

リエナは二人にさりげなく諭したが……………。

「陛下は貴方をきっちりと見てから選んでいますよ。仮にも皇帝ですから、信用できない者を側に置くような馬鹿な真似はしませんよ」

そう、宰相に反論されてしまった。

「そんなことを俺たちに忠告する時点でナツは良い奴過ぎる」

陛下に笑われてしまった。

「ですが、傭兵は金を積み重ねれば、どんな手汚い仕事でもやってくれます。善良な騎士様とは全く違うのですよ？」

「でも、ナツは違うのでしょうか？」

宰相が問う。

「そんなわけ……………」

そんなわけ、ない。

今だって、ナツという立場を利用してリエナ・リサーチに使える情報を集めている。

「俺が認めただから、変な奴を選んだら俺の責任だ」

そう言いながら、皇帝は茶菓子を摘まんで口に運ぼうとした。

あ。

「陛下、それは毒入りです！！」

思わず叫んでいた。

リエナは必死だったのだが、皇帝を見ると笑みを浮かべていた。

「ほら、ナツはこうやって俺のことを心配してくれるだろう？」

毒味に関しては任務外だ。ナツがそれを指摘しなくて皇帝が倒れたとしても、責任を問われることはない。皇帝は、ナツが毒入り茶菓子の存在に気づいた上でどうするか伺っていたようだ。

「それに、プライベートのことを語ったのも、俺がナツを全面的に信頼しているからに他ならない」

「そこまで信用していただけで光栄です」

皇帝に試されていたことに不機嫌になりつつも取り敢えず、そう返

しておいた。

「では、ナツを正式にここで雇うか」

「良いかもしれませんがね。私は歓迎しますよ。彼は護衛もできますし、紅茶も淹れられる」

「毒味もできるようだしな」

と皇帝が付け加える。

これはまずいかもしれない。

なんか、後宮にいた時と何ら変わらない状況に陥っているような……

……特に、自分の意思とは逆に物事が進んでいくあたりが。

リエナは嫌な予感がして仕方がなかった。

11・弱味を握られるって恐ろしい

最近、妙に視線を感じる。しかも、微妙に殺気が混ざっているのはどうしたことか。

皇帝に仕えるようになってから数日が経過していた。皇帝は初日から変わらずナツを側で働かせ続けている。

その間中感じるのだ、殺気の混じる鋭い視線を。

皇帝の護衛をしている時も、皇帝とお茶している時も、皇帝とチェス（異世界版）を楽しんでいる時も。

しかもそれは、皇帝ではなく自分に向けられているものである。

「ナツ、どうした？」

いつもと違うナツの様子に気付いた皇帝が声をかけてくる。

「いえ、なんでも……………」

リエナは慌てて取り繕う。今は仕事に専念しなければ。私的な問題で皇帝を煩わせるようなことがあってはいけない。

「そうか、気を張りすぎて疲れないようにな」

皇帝はぽん、とリエナの頭の上に手を置いた。自分も随分と気に入られてしまったものだ。

彼は何かと頭を触る癖があるらしい。身長的に手が置きやすい位置にあるからだろうが、上手に紅茶を入られた際には頭を撫でるし、何気なく頭にぽんと手を置くこともある。

そういう時には特に、物凄い殺気を感じるのだ。……………なぜ？

傭兵として色々な仕事をこなしてきた自分を排除しようとする輩は少なからずいるものだが、それとは少し違うらしい。だからしばらくの間は様子見ということで放っておいたのだが、どうにも気になって仕方がなかった。

「ついて来い。話がある」

近衛隊長から呼び出されたのは、ナツが皇帝に雇われ始めてから5日後のことだった。

以前からこうなることは何となく想像がついていた。あの殺気を向けていたのは、近衛隊長だったからだ。

彼は、ナツの扱いに対し、不満を持っていたらしい。

他の護衛が公爵家のせいで皇帝の命令を聞かなくなる中、この近衛隊長だけは主君に忠実であり続けた。護衛が使い物にならなくなつたとわかつたその日から、ろくに睡眠も取らずに全身全霊で皇帝を守り続けていた。

それなのに、皇帝は素性も実力も知れない傭兵を雇い、しかも片時も側から離さないときた。

金次第でいつ自分の敵に回るかわからない傭兵を信賴し、今まで仕えてきた自分の忠誠を理解してくれない皇帝に、直接その憤りをぶつけることは出来ない。だから、それがナツに向けられることは仕方がないと言えよう。

ちなみに、近衛隊長の堅苦しすぎるところが皇帝は苦手らしく、大切な臣下だとは思うものの、打ち解けた間柄にはなれないらしい（リエナ・リサーチより）。

「今から皇帝陛下のお茶の用意をしなくては……」

そう言っただ断ろうとしたが、ぎろりと睨まれてしまった。

「それは侍女の仕事だろう。お前の仕事は陛下の護衛だけだ」

つまり、傭兵ごときが余計なことまでするな、と言いたいらしい。

「ですが、毒の混入を防ぐためにも必要だと陛下が仰られて」

「なら私が陛下に許可を取ろう」

そんなこんなで近衛隊長から逃れることは叶わず、結局面白かった皇帝が許可を出してしまった。

やって来たのは近衛隊の訓練場だった。彼の考えていたことはやはり。。

「武器は何でも構わない。俺と手合わせしろ」

そう言い放つと、近衛隊長はいきなり剣を抜き、殺気を放つ。

剣を構えて立つ姿はとても美しい。こうして見ていると本当に様になる。

整った容姿に冷ややかな双眸。鍛え上げられたその体軀は、傭兵の目から見ても見事だ。

これで良いとこの貴族の次男坊だと言うのだから、令嬢の気は相
当の者だ。その人気は皇帝には及ばないものの、皇帝に手が届か
ないと理解した者の一部は、次に彼を狙う。残りの大半は宰相を狙
うらしいが。

さて、そんな悠長なことを考えていると、近衛隊長が動いた。

この力をまともには受けるとまずい。そう思ったリエナは、彼の剣筋
を見極めてかわす。

だが、さすが近衛隊長。すぐに次の攻撃に移る。

避けきれないと感じたりエナは短剣を取り出し、迫りくる刃を受け
流す。

「なかなかやるな。だが、その程度では私には勝てないぞ」

互いに剣を構え直す。緊張した空気が辺りを支配する。

そんな中、ふと、近衛隊長以外の視線を感じてそちらを見る。

そこには、王宮の二階から愉快げに試合の成り行きを見ている皇帝
と宰相の姿だった。

……………くっ、あの二人、愉しんでいるな。

「何をよそ見している!!」

おっと、危ない。

近衛隊長が斬りかかってきた。リエナは避けようともせず、ポケ
ットから秘密兵器を取り出した。

「香料爆弾をどうぞ」

ぽいっと投げると、見事近衛隊長の顔面に命中。

「くっ、けほっ……」

思いがけない攻撃を受けた近衛隊長は、リエナから視線を外してしまった。まさか、手合わせでこんな卑怯な手段を使われるとは、夢にも思わなかったのだろう。

「はい、終わりです」

リエナは近衛隊長の首筋に短剣を当て、勝利を宣言した。

近衛隊長は、渋々といった感じで自分の負けを認め、剣を納めた。

「きちんとした剣を習ってきた隊長から見ると俺の戦いは卑怯に見えるかもしれませんが、どんなことをしてでも必ず陛下を守ると誓います」

「いや、陛下の命を守るのに手段など関係ない。実力を疑ったりして悪かった」

うわあ、いきなりなんて殊勝な態度だ。

「だが、お前が陛下の邪魔になるようなことがあれば、容赦なく叩き斬る」

と思ったら、全くの勘違いでした。

まあ、これで彼の確執は消えたはず。リエナがほっと息を吐いて

いると……。

「そういえば、怪我をしていたな。手当てをしてやるう」

……………その申し出はありがたいが、一つ、問題がある。

ナツが、女だということだ。

「いえ、自分でできますから!!」

「遠慮することはない。見せてみる」

リエナは先程の戦闘より緊張し、手にはじつとりと汗をかき始めた。肩から鎖骨の下あたりまでうっすらとある傷は、さすがに人に見せるわけにはいかない。手当てのために脱いだら、即座に女性とわかるだろう。

「あの、本当に……」

いいです、と断ろうとすると。

怪我をしていない方の肩を掴まれ、すぐ側の椅子に座らされた。近衛隊長は、抵抗するリエナを押さえつけ、上着を脱がし始めた。その途中で、ピタリと手を止める。

「お前……………まさか……………」

ヤバい、バレた？

最後までバレてないことを願いながらも、近衛隊長の表情から判断して、その可能性は諦めた方がよいとわかる。

「女、だな？」

こちらに向けられた鋭い瞳と目を合わせる事が出来ず、リエナは目を逸らした。

その様子に、近衛隊長はにやりと笑みを浮かべた。

「さて…この秘密、皇帝陛下に黙っておいても良いが？」

弱味を握られたー！ー！？

異世界に渡って以来、初めて人に隙を見せてしまった。

「傭兵に性別は関係ありません」

「だが、皇帝に露見するのは困るのだろうか？」

悔しいが、その通りだった。女だとわかると、後宮で皇帝と鉢合わせした時に気付かれる可能性が高くなる。ナツは敵国の間者と疑いをかけられても文句は言えない。

えーい、こうなったらー！

リエナは最終兵器を出す決意をした。日本人と言えば、これでしょう。

土・下・座ー！

「お願いです、貴方が実は皇帝陛下マニアだなんてことは黙っておきますからー！皇帝陛下に斬られた服を額に入れて大事に保管していることは言いませんからー！ー！」

「……………何故知っている」

近衛隊長は、目を見開いてこちらを振り向いた。

抜かりはない。

こういった事態に対処できるように、貴族の弱味はきちんと握っている。

「お願いします！皇帝陛下の絵姿を自室の天井や壁いっぱい飾っているだとか、言いませんから」

「おい、落ち着け……………」

「皇帝陛下が魔法で壊した陛下の私物を収集しているなんて言いませんし」

「おい……………」

「ましてや、巷で流行っている皇帝陛下を題材にした妄想小説の原作者が貴方だなんて絶対に言いません！！！！！！」

書いているのは別人らしいが、近衛隊長は間違いなく小説のネタの情報提供者だ。

「わかった、わかったからそれ以上言うな！！！！黙っておいてやるから！！！！」

よっしゃ、遂に近衛隊長を攻略したぜ！！

その日以来、近衛隊長はナツに対して殺気を放つことがなくなった
どころか、不用意にナツに会うことを避けてナツにめっきり近付か
なくなつたとさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3125u/>

「白銀の華」の代わりにどうぞ。

2011年9月28日18時36分発行